

## 牛乳瓶

首の細い牛乳瓶



紙・コルク・金具<sup>せんふた</sup>栓蓋の瓶



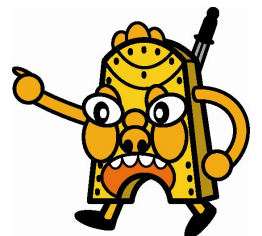
王冠<sup>ふた</sup>蓋

出土遺跡 吉塚本町遺跡

これらはガラス瓶が牛乳の容器に使用されはじめた明治中期から昭和初期の牛乳瓶です。現在のものどちがって小型で、口が細く、色付きのものがあります。牛乳を販売している会社や牧場名が浮き彫りで入っているものもありますが、いずれの名前も現在は見るできません。

牛乳瓶は当初、紙をねじった物やコルクで蓋をした小さな瓶でした。明治33(1899)年以降は雑菌の混入を防ぐため、コルクを針金で止めたり王冠の蓋が使われるようになりました。細長い首の瓶は針金で留めるもので、口に丸い膨らみがあるものは王冠がつくものです。

鉄道の駅名が入るものは駅で牛乳を販売していたものです。駅名のあとに続くのは販売した人名か会社名です。遺跡は JR 吉塚駅付近なので販売された駅で買った瓶を吉塚駅で捨てたものでしょう。他にも同じ時期のビール瓶やラムネ・ニッキ瓶・薬瓶などが出土しており、当時の鉄道の旅の様子をうかがうことができます。



#### 4－3 中は様々、形も色々！ガラス瓶

①

##### 福岡県における牛乳販売と牛乳瓶の歴史

明治時代に入ると、政府は殖産興業のために西洋式大型牧場を広めようとし、家禄奉還した士族に牧場を作することを勧めました。このとき元士族によって各地に牧場が作られましたが、多くは失敗しています。本県でも元秋月藩士により明治 19（1886）年に共立社が作られましたが、資金難のため長続きしなかったようです。その一方で、明治 5（1872）年に小倉藩の御用商人だった中原<sup>かぞう</sup>嘉左右が北九州市<sup>もじ</sup>門司区<sup>つねみ</sup>恒見に牧場を作り、いち早く事業を成功させています。

その後、明治 27（1894）年に福岡市薬院に王丸牧場が、明治 35（1902）年に福岡市千代に阿部牧場が設立されるなど小規模な牧場が作られ始め、庶民にも牛乳を飲む習慣が広まりました。このころは病人向けの高級な栄養補助飲料として扱われていました。

明治 30 年代になって、ガラス瓶に入れて販売されるようになりましたが、それまでは桶や金属缶に入れて天秤棒で担いで歩き、売る時は柄杓で量りながら買う人が持ってきた容器に移すという非衛生的な販売方法だったため、集団食中毒が起りやすい状況でした。

明治 33（1900）年に牛乳営業取締規則により販売方法の規制が厳しくなり、小規模な牧場では設備費が不足するため、共同して会社を設立するようになりました。明治 34（1901）年に久留米で久留米牧牛株式会社が設立され、久留米牛乳会社に発展しました。明治 44（1911）年には遠賀町若松に若松搾乳株式会社、直方市下新入に鞍手搾乳株式会社、45（1912）年には北九州市折尾に折尾搾乳株式会社が設立されました。大正時代から昭和初期にかけては福岡県内に多くの牧場や牛乳販売会社が作られ、昭和 9（1922）年には牛乳販売業を営むものは大小合わせて 246 にのぼりました。その多くは戦時中に整理統合されるか、廃業しており、戦後も大会社と合併するなどしてほとんど残っていません。

牛乳による食中毒はその後にも発生し、衛生対策はさらに厳しくなりました。昭和 3（1928）年に瓶の殺菌を義務づけるとともに着色瓶を禁止し、無色透明の広口瓶で紙栓にすることに決めました。さらに昭和 26 年に無色透明のガラス瓶の使用を法律で義務化し、徹底されました。

現代のようなスタイルの瓶になるのは昭和 33（1958）年からで、この時ビンの口内径は 26mm 以上と定められましたが、現在では直径 34.1mm の紙栓をする瓶に統一されています。昭和 45（1970）年以降は一合瓶から 20ml 増量して 200ml の瓶が中心となりました。これは当時の厚生省が学校給食用牛乳の標準容量を 200ml に策定したことによります。

牛乳瓶は、栄養のある牛乳を安全に販売するために、試行錯誤を繰り返して現在の形になったのです。

参考文献：福岡県酪農業協同組合連合会 1976『福岡県酪農史』

福岡県教育委員会教育委員会 1992『吉塚本町遺跡』福岡県文化財調査報告書第 97 集

写真：当館撮影

## 目薬瓶

むかしの目薬はガラス瓶だった



一口式「<sup>だいがく</sup>大學目薬」瓶



一口式「<sup>さいかい</sup>西海目薬」・「九州目薬」瓶



両口式「<sup>だいがく</sup>大學目薬」点眼瓶



両口式「<sup>ロート</sup>ロート目薬」点眼瓶

出土遺跡 <sup>いせき</sup> 矢加部町屋敷遺跡

これらは目薬瓶です。瓶型のものと細長いものとありますが、どちらも現在の目薬とはずいぶん形がちがっています。

瓶形のは明治時代の目薬瓶で、当初は綿棒に薬液を染み込ませ垂らして点眼していましたが、後にスポイトで吸い取り点眼する方式になりました。田口参天堂（現・参天製薬）が明治 33(1899)年に開発し「<sup>だいがく</sup>大學目薬」として発売しました。これ以降、同じ方式のいろいろな目薬が作られました。

細長いものは両口式点眼瓶と呼ばれるものです。上部にゴム製のピストンを取り付け、適量を衛生的に垂らすことが可能になりました。昭和 6 (1931) 年に信天堂山田安民薬房（現・ロート製薬）が発明してロート目薬（1909 年発売）として発売し、大ヒットしました。

戦後の昭和 37 (1962) 年にプラスチック製の瓶が開発され、壊れにくく柔軟性があるプラスチックが作られるようになると現在のように容器自体を指でこませて適量を点眼することが可能になりガラス瓶は見られなくなりました。



#### 4-3 中は様々、形も色々！ガラス瓶

②

##### 須恵の<sup>しょうめいこう</sup>正明膏

江戸時代の須恵町には、福岡藩の藩医を務めた有名な眼科があり、須恵町に治療に訪れた人は年間千人を超え、宿場町の様相を呈して栄えていました。須恵の目薬は正明膏と呼ばれ、赤い絹に包んで二枚貝の貝殻に入れてありました。薬はペースト状のもので目の縁に塗るか、水に溶いて使うものでした。昭和 20 年代まで盛んに製造され、筑前須恵眼目療治関連資料は福岡県有形民俗文化財に指定されています。

##### 最初の洋式液体目薬「精錡水」

江戸時代の終わり頃に日本に来ていたアメリカの宣教師で眼科医のヘボン（ヘップバーン）に目の治療をしてもらった岸田<sup>ぎんこう</sup>吟香がヘボンに処方方を教わり、慶応 3（1867）年、東京・銀座に楽善堂という薬屋を構えガラス瓶入りの目薬「精錡水」を販売しました。ヘボンは「ヘボン式ローマ字」で知られる人物です。「精錡水」は硫酸亜鉛（Zink sulfate）を主成分とし、Zink を中国語読みで漢字の当て字にすると「精錡」となったものです。「精錡水」はそれほど広まりませんでしたが、その後に作られた「大学目薬」は、東京帝国大学で研究された様々な成分を配合したことを、大々的に宣伝したことで大ヒットしました。



東京都<sup>しおどめ</sup>汐留遺跡出土  
「精錡水」目薬

##### 両口式点眼瓶

両口式点眼瓶は昭和 6（1931）年に信天堂山田安民薬房（現・ロート製薬）が開発し、全国メーカーに広まりました。この容器は両方の口にゴムが取り付けられ、一方が点眼口、もう一方は指押し部分でした。これにより点眼器がいらなくなりましたが、太平洋戦争中はゴムの供給が激減したため、一口タタキ点眼瓶という筒状の瓶に替わりました。瓶の底を軽く叩いて滴下するこの方式では叩く時に瓶が押されるので目を傷つける恐れがありました。

そのため、戦後一口タタキ点眼瓶の円筒形を残した両口点眼式が再び作られ、昭和 37（1962）年には軽くて割れにくく点眼しやすい、プラスチック製点眼容器が販売され、約 100 年続いたガラス容器は終焉を迎えました。

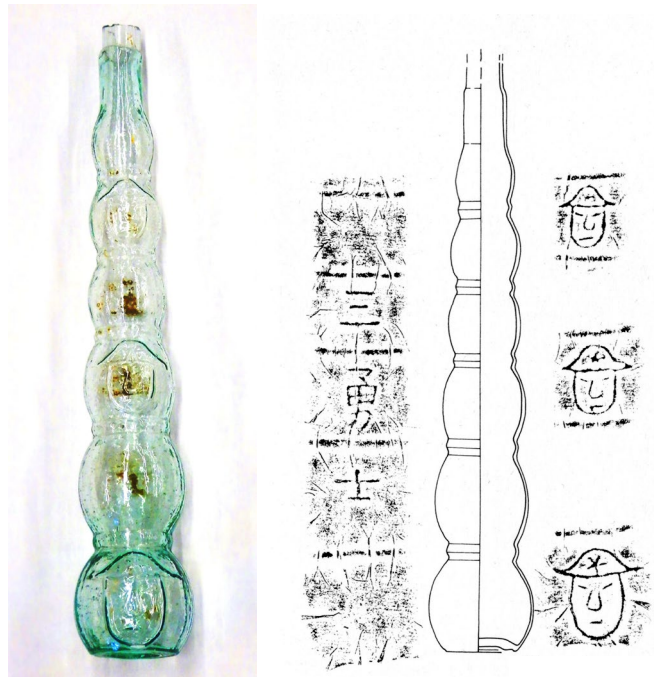
参考文献：福岡県教育委員会 2007『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路関係埋蔵文化財調査報告第 3 集

福岡県教育委員会 2011『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路関係埋蔵文化財調査報告第 11 集

写真：当館撮影

## 爆弾三勇士文ニッキ瓶

爆弾三勇士ブーム便乗商品



出土遺跡 <sup>ひづめ</sup>うきは市日詰 遺跡

昭和初期のゴミ穴から出土したガラス製ニッキ瓶です。片面に「三勇士」、反対面に三人の兵士の顔が陽刻された「爆弾三勇士」をモチーフにした商品です。

「爆弾三勇士」とは、昭和7（1932）年の上海事変で中国軍陣地の鉄条網に対して、突撃路を築くため、点火した破壊筒を持って敵陣に突入し、自らも爆死した3人の兵士のことです。これが新聞によって美談として大々的に報道され、さらにマスコミが競って賛美したため、賛美する歌が作られ、全国の寄付金で銅像が建てられるなど大ブームとなりました。このブームに便乗して、爆弾三勇士を題材にしたいろいろな商品が作られており、本品はその頃のものです。

下線の付く言葉の解説は裏面にあります



③

### 爆弾三勇士

「爆弾三勇士」は「肉弾三勇士」とも呼ばれ、陸軍第 24 旅団独立工兵第 18 大隊の、江下武二、北川丞、作江伊之助各一等兵の 3 名のことです。第 24 旅団は上海事変において廟行鎮の中国軍陣地の堅固な鉄条網を突破するために、20 キロの爆弾を包んだ長さ約 4 m の竹製破壊筒を鉄条網に挿し込んで爆破する作戦をとり、工兵部隊から 3 人 1 組で破壊班を選出して突入させましたが、敵の砲火が激しく爆破はなかなか成功しませんでした。そのため、鉄条網にたどりついてから爆弾に点火する余裕はないと判断し、三兵士はすでに導火線に着火した破壊筒を持って鉄条網に突入し、鉄条網に突撃路を開いたというものです。

新聞報道直後から、上官の命令で爆弾に着火して戻ることが許されなかったという説や、導火線を短くしすぎた技術的ミスであったという説が出ていましたが、三勇士ブームに沸いていた当時はこうした疑念はかき消されていました。しかし、同じ攻撃に参加した別の班も同様の攻撃を行い、戦死者が出ているのに、この 3 名だけが讃えられていることからみて、マスコミによって作られた英雄といえます。

### 爆弾三勇士と久留米市

爆弾三勇士が所属していた第 24 旅団が久留米市に司令部があったこともあり、久留米でも大変な人気となりました。

福日新聞は久留米市公会堂（現市民会館駐車場）の前に三勇士の銅像が建てました。原型製作は彫刻家松尾薫、鑄造は現代工芸の旗手として活躍していた久留米出身の豊田勝明です。銅像は戦争激化による金属回収の国策により供出され、現存していません。

馬の絵で有名な久留米の画家坂本繁二郎は、ブリジストン社長の石橋正二郎の依頼で 3 年かかって 3 点の三勇士の絵を描き上げたとされています。戦時下多くの画家が軍部の宣伝活動に協力して戦争画を描きましたが、坂本繁二郎が描いた戦争画はこれだけだといいます。

また、久留米市朝妻にあった工兵隊基地内には三勇士記念館が建てられ、関連資料が大切に展示されていましたが、終戦後ほとんど焼き棄てられ、僅か一部が永福寺や千光寺におさめられています。